

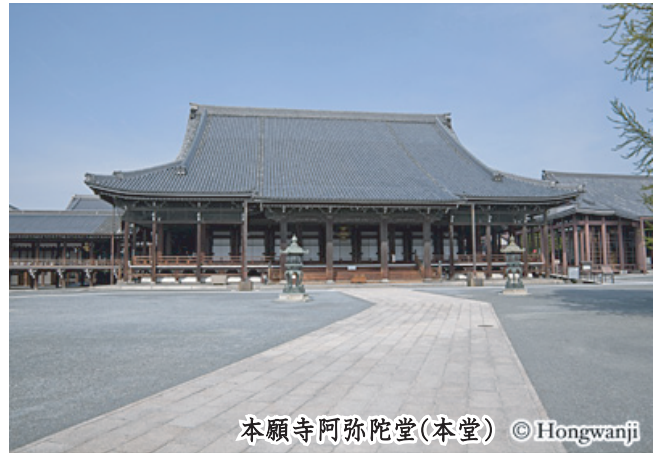
な るほど その18 本願寺

本願寺の歴史 パート4

天正19年(1591)秀吉の京都市街経営計画にもとづいて本願寺は再び京都に帰ることとなり、顕如上人は六条堀川の現在地を選び、ここに寺基を移すことに決められた。阿弥陀堂・御影堂の両堂が完成した文禄元年(1592)、上人は積年の疲労で倒れられ、50歳で往生された。

長男・教如上人が跡を継がれたが、三男の准如上人にあてた讓状があったので、教如上人は隠退して裏方と呼ばれた。これには大坂本願寺の退去に際して、講和を受け入れた顕如上人の退去派と信長との徹底抗戦をとらえた教如上人の籠城派との対立が背景にあった。その後、教如上人は徳川家康に接近し、慶長7年(1602)家康から烏丸七条に寺地を寄進され、翌年ここに御堂を建立した。これが大谷派本願寺の起源で、この時から本願寺が西と東に分立したのである。

これより先、本願寺は慶長元年(1596)の大地震で御影堂をはじめ諸堂が倒壊し、阿弥陀堂は被害を免れた。翌年に御影堂の落成をみたものの、元和3年(1617)には失火により両堂や対面所などが焼失した。翌年阿弥陀堂を再建し、18年後の寛永13年(1636)に御影堂が再建された。このころ対面所などの書院や飛雲閣、唐門が整備された。ところが元和4年に建立された阿弥陀堂は仮御堂であったので、宝暦10年(1760)本格的な阿弥陀堂が再建され、ここに現在の本願寺の偉容が整備されたのである。(完)



本願寺阿弥陀堂(本堂) © Hongwanji



善教寺山門

や香炉はいつもより入念にみぎまきです。

この報恩講は、親鸞聖人の三十三回忌にあたり、本願寺第
三代覚如上人が、そのご遺徳を讃仰するために『報恩講私記』
をつくられ、勤まるようになり
ました。

善教寺がこの地に開基して
五〇五年。五百年以上の長きに
わたり、善教寺でもこうして毎
年勤め続けてきた報恩講です。
今後も大切に勤め続けていき
ましょうね。

住職レター

例年九月のお彼岸頃から、各ご門徒宅の報恩講を
勤め始め、十二月二日の善教寺本堂での報恩講をピー
クに、その後は五月の連休くらいを目途に勤め終わら
ます。しかし、中々予定通りに勤めることは出来ませ
ん。報恩講参勤を予定しておりましたら、その日に葬
式が入ったり。中には、予定が立て込み、一カ月くらい遅く参
勤してしまったり。

各ご門徒宅の報恩講参勤は、一昔前は、その地区の世話人
さんに、「〇日から〇日にかけて参勤します」と伝えておけば、
全て、その世話人さんが段取りをして下さっていました。しか
し今は、善教寺の方から、各ご門徒宅へ参勤日を記した葉書
を郵送しております。

十一月の終わりを迎え、善教寺本堂での報恩講、近くなって
きました。お接待当番地区の世話人さんと打ち合わせをして、
お斉(報恩講料理)具材の注文。おつぼ菓子やみかんの注文。
お荘厳準備にあたり、朱蠟燭(赤いローソク)の購入。仏具